

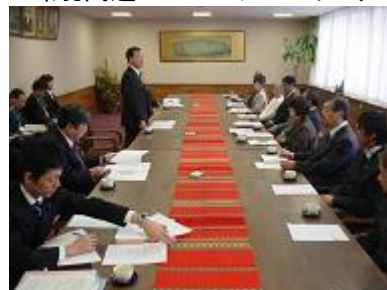
市長室：対話の記録

要旨

開催内容の公開

- ・市長あいさつ
- ・内容
- ・市長終わりのあいさつ

第 23 回目となる今回は、地域における自主的な環境の学習や保全活動を支援するため、同じ市民の視点で日常生活などの環境問題についてアドバイスすることなどを目的として活動している「旭川市環境アドバイザー」の方々と日頃の活動状況やまちづくりについて対話、意見交換を行いました。



日時	平成 20 年 1 月 15 日(火) 午後 1 時 00 分～午後 2 時 30 分
場所	秘書課 第 1 応接室(旭川市役所総合庁舎 2 階)
相手団体	旭川市環境アドバイザー 11 名
出席者	旭川市長 西川将人 旭川市環境アドバイザー 11 名(敬称略) 浅野晃彦 石井邦子 岡出景子 奥山 博 菊池邦雄 鈴木みち代 丹下 学 安田志津吉 松尾清子(旭川消費者協会) 宮嶋睦子(旭川消費者協会) 寺島一男(大雪と石狩の自然を守る会)

対話の内容

以下、参加者の皆様については、敬称を省略させていただきます。

市長はじめのあいさつ

今日はみなさん大変忙しい中、また悪路の中、市役所までご足労いただきありがとうございます。

ざいます。

私も市長就任後、「まちづくり対話集会」ということで、これまでに各団体の方々、地域の方々とお話をまいりましたが、今回は環境アドバイザーのみなさまにも直接お話を聞きたいということで、このような機会を設けさせていただきました。1時間30分という限られた時間ではありますが、みなさまが市内の各地域で活躍され、講師として派遣されて市民から聞いた話をはじめ、ご提言を含めてお聞きしたいと思っております。

平成9年度に環境アドバイザー制度がスタートして、11年目を迎えたということですが、学校、団体のみなさまなどに環境についての知識の普及や啓蒙の部分で講師なども務めてもらいまして、私どもも昨年8月にはごみの有料化をさせていただきましたが、行政としても、私どもの思いを市民のみなさまへこれまで伝えていただいておりますことに感謝申し上げます。

先ほどお聞きますと、これまでに学習会を170回開催し、参加者が延べ7千人を越えるということですから、市にとって大変な宝・財産を生み出したのだなと思っております。今後とも「まちづくり」、「地域づくり」にご支援いただければと思っております。

また、今年はこちら洞爺湖で環境サミットが開催されますので、毎日のようにテレビ、新聞で取り上げられておりますが、京都議定書の取扱いについて、日本のリーダーシップが問われており、厳しい記事が書かれています。1990年に比べて日本は6%二酸化炭素を削減するという約束ですが、達成への道のりは長いと思っております。これは国だけでできるものでもないの、各自治体での1つ1つの積み上げではないかと思っております、この約束は厳しいものがあると認識しております。



旭山動物園にホッキョクグマがおりますが、北極の氷がどんどん溶けはじめて全てなくなると、関東平野や濃尾平野が海の下に沈み、オランダのような状態になり、水を排出する必要が生じることが将来起こるかもしれない。こうなるとホッキョクグマも絶滅し、地球の生態系も変わるでしょう。地球の生態系も変わって海流の流れも変わり、サケが北海道に戻ってこなくなり、日本人がサケを食べられないかもしれない事態が起こるかもしれませんね。

化石燃料という石油を燃やすことで私たち人類が地球文明をおう歌していますが、今、石油の高騰で市民の生活が大変厳しい打撃を受けておりますが、石油資源は限りあるもので、いつかは石油もなくなります。不思議なことですが、私は北大工学部で資源開発工学を専攻してまして石油探査の専門だったのですが、その当時から60年で石油資源がなくなると聞いていたのですが、20年たった現在まだ60年あると言われております。当時聞いていた探査技術の進歩で、今まで以上に深く海底まで掘れるようになったからかと思っておりますが、探査技術の進歩によりさらに深く掘れるようになると、後30年くらい経っても60年もつかもありません。

しかし、長く続くほど裏腹に地球環境が汚染され悪化すると心配しています。1日も早くクリーンエネルギーへの転換に向けて技術開発の進歩が図られれば良いと考えております。

以上、簡単に冒頭のあいさつとします。今日はみなさまのお話を聞かせていただければと思っておりますのでよろしく申し上げます。

奥山

本日はお忙しい中、市長をはじめ市職員の方々におかれましては、私ども環境アドバイザーのためにこのような場を設けていただき、またご出席いただきありがとうございます。

市長からお話がありましたとおり、「環境アドバイザー制度」ができて10年が過ぎるわけですが、この間の歩みや概要について、また私ども環境アドバイザーとしての派遣活動・実践の中で得たことをお話しして、市長をはじめみなさまのご指導を受けたいと、この「まちづくり対話集会」の開催を希望しましたのでよろしく願いいたします。

今、市長からお話のあったとおり、平成9年度に環境アドバイザー制度がはじまりましたが、その前に講習会有り、平成7年は48人が受講し、平成8年には15人の受講者が講習終了後、レポート提出、アンケート、個別相談などを経て平成7年度に21人、平成8年度に4人、計25人が環境アドバイザーに任命され発足しました。

同時に、市民の良好で快適な環境の保全に寄与するため、アドバイザーの資質向上を目指すことで、環境課の指導の下で、引き続き養成課程のいろいろな分野で市民からの要請があった場合に応えることや、テーマに沿った学習をする目的で旭川市環境アドバイザー連絡会が結成され、事務局が環境課に置かれました。

それから市民の要請に基づき派遣がはじまり、安全食品・生活排水・自然保護・ごみ・生活美化・生活環境・地球温暖化など広範囲の助言をしてきました。ところが問題は市民の中になかなか浸透しづらい点があったことです。活動の場である派遣が、ピーク時の平成12年度で28回、1人年1.4回から、だんだん要請が減って平成16年には1人年0.8回と、年1回当らなくなってきました。

アドバイザーの数も15人に減り、そのためか平成18年度に市民のいろいろな要請が増えるだろうということで、これに応えるために要綱が変わって、委嘱から登録制になり、養成の講習会を受けなくても登録されたり、団体が登録されたり、謝礼の減額もありました。また、連絡会の事務局も環境課の中から外部にはずされることになりました。

そのようなことで会員は5人退会し、現在9人になりました。また連絡会の会員も11人から7人となっています。市民の講師派遣要請も増えずに減る傾向にありますし、このアドバイザー制度は環境部でもPRの努力はしているのですが、私どもとしては多くの要請がきて、大いに活躍できるように持っていきたいと願っております。これについて行政面のご指導が何かありましたらよろしく願いいたします。

市長

今のお話で、派遣回数が少ずつ減っているとお聞きしましたが、なぜなのでしょう。どのような背景があるのでしょうか。

環境部長

平成9年の発足時から派遣が始まっておりますが、前年の平成8年度からごみの5分別が始まった時期で、その前に2年間をかけて研修してアドバイザーの養成をしてきたことは先見的だったと感じています。会長のお話のとおり、10年経過して、これまでPRしてきたつもりですが、なかなかそれが末端まで行き渡らず、派遣回数が減ってきたと思います。それは環境はごみだけでなく、自然保護、大気・土壌などの環境汚染と範囲が広過ぎる点にあるのではないのでしょうか。

平成10年度からの数字を見ると、近年の派遣回数は確かに減っていますが、参加人数はそれほど減っておらず、1件当たり平均40人ぐらいの参加で推移しています。

お話しにあったように、環境サミットの開催や地球温暖化が昨今クローズアップされてきていますから、これから需要が増えるのではないかと見ています。また、子どもの方の要請の点では、学校の側にゆとりの時間が減って余裕がなくなってきて要請が減ってきているというのが現状です。

市長

私も環境という部分は重要と思っています。今後ともいろいろな機会にPRしてもらうこと、市民に知ってもらう機会をつくることを、サミットの年でもあるので、心がけていきたいと思っています。

石井

環境アドバイザー制度を知って活用していただきたいと思っています。

旭川市の重要文化財、天然記念物などの他にも大切なものがありますが、市民の知恵の中からできた対外的に誇れるものが3つあります。

それは全国初の歩行者天国です。今では全国のあちこちでまねされていますが、肝心の本家である旭川市の歩行者天国が自転車置場と化してしまって情けないと思います。次に、旭山動物園です。今では全国的に有名になっています。

3つ目は環境アドバイザー制度です。市民が市民の目線で語るといえるものです。大切に守り育てて発展させてきたと思っています。

環境アドバイザーが発足して11年が経過したのですが、この間いろいろな活動をしてきており、また私たちの資質向上をめざし、見学会や学習会を重ねてきました。

ところが市議会議員や市職員も、ましてや市民の中にもこの制度を知らない人が多いです。10年以上経ても知られていない制度ですので、派遣された時に「環境アドバイザーとは何か」から話し始めなければなりません。

10年、11年といっても隔世の感がありまして、市の環境部は私たちが活動を始めた頃は市役所の隅っこの方で仕事をしていました。今は国の方でも環境庁から環境省に昇格されています。新聞、テレビで環境サミットが取り上げられていますが、特に温暖化対策は待ったなしで人類の生存に関わる大変なことなので、そのような時代になったからだろうと思っています。

財政状況が厳しいと認識していますが、環境アドバイザー制度は市民の知恵と力の結集でできた制度であり、税金を使って養成した安上がりの制度ですので、市長をはじめ、もっと行政に役立ててほしいと思っています。

以前は市主催の公民館などでの講習会があったのですが、予算の関係なのでしょうが、最近は無くなってしまったようです。特に子ども向けの自然環境などの講座が減り、日ごろから勉強して準備して、これを得意分野にしていたアドバイザーの出番がほとんど無くなって、何人も辞めていき大変残念です。私たちの活動の幅も狭まってしまいました。

「環境都市」宣言を自認していますが、今年一年はごみの有料化で明け暮れたようなものです。私たちの活動は、市民にもっと環境のことを考えてもらって勉強してもらい、ごみも根本は環境問題にあると思うのです。

年一度、公民館の事業に環境アドバイザーを講師とした環境学習を取り入れることができないものかと思っています。

税金で養成され、作られた制度なので活用しない手はないです。活用するべきです。もったいないと思います。この制度ができてたった10年かもしれないですが、それなりの積み重ねがあります。微力ですが頑張る気概もあります。いろいろなところに役立てて活躍させてほしいと思います。

市長

お気持ちは十分理解できました。前向きに考えてみたいと思いますが、どういう活動に参画いただけるか内部で検討・議論させていただきたいと思います。

菊地

私は子どもを対象にした自然環境・森林の大切さを伝えたいと思っていますが、息が長い取組が必要になると思っています。学校など子どもに自然環境を考えさせる場があれば、話をしに行ってみたいです。

緑の豊かなまち旭川には共感するものがありますので、河畔の四季が楽しめる景観にする効果的な緑化を考えました。

旭川は地震や台風などの災害がない、道内でも他に例のない良い所です。特に冬の雪が良い、これほどの雪に恵まれたまちはない、森林の上に雪がある「雪のまち旭川」を全国へPRしてほしいのです。

そこで北彩都事業にかかわってですが、計画の半分くらい過ぎて残り4、5年しかないので、私の提案ももう間に合わないかもしれないですが、一応考えたことを言っておこうと思います。

高架になって目に留まるのが、駅周辺・駅南の忠別川の河畔の豊かな緑ですが、駅のホームから見て四季のメリハリがほしいと思います。春の桜やこぶし、夏のハマナス、秋

の紅葉、冬の雪と常緑樹など樹木の群生的な固まりを望んでいます、緑地帯が良いと思うのは、普通の公園的な芝と低木による河畔でなく、変わったところがあっても良いのではないかと思うのです。針葉樹で立派なのは近隣では鷹栖にしかない、トウヒ(唐檜)は緑橋通の2~3条にあるのですが、河川敷に大きな針葉樹はだめでしょうか。

また、クリスタルパークが完成し、木を植えて立派になったのですが、花壇、草刈りなどの管理を職員4人でしているが、手が回らなく雑草に負けてしまっています。そこで提案ですが、地域住民に委託してはどうでしょうか。雑草を除き整備するだけで良いのだが、どうでしょうか。

市長

その場所は針葉樹の育つ土壌なのでしょうか。

環境部長

針葉樹は育ちが遅いと思いますし、また国が管理している川の河川敷に大きい木を植えることは難しいのではないのでしょうか。

市長

調べてみたいと思います。

石井

クリスタルパークも国の管轄と聞いていますが。

生活交流部長

市の公園ですね。

寺島

河川敷や河畔林については、河川事務所でも河畔林の連続性について検討しています。新河川法以前は、堤防と川の間は木を植えないことになっていて、密生する木は取り除くことになっていましたが、今は治水上問題がなければ川の上の木は皆伐しないことになりました。川は降水時期により広いところも狭いところもあるが、低水時より上の木は大事にし、またミズナラやヤチダモは現在も護国神社に残っていますが、国でも残す方針になっているので北海道内でも復活させる方針で取り組むとよいと思います。

市長

国の敷地なので規制がどうなっているのか調べてみないと分からないですね。

菊地

規制があるのは理解していますし、ここまで進んだ段階で遅すぎた提案とも思いますが、美瑛川の堤防には見本林があるし、今は少し高くなったところにある神楽岡公園の木もとは河川敷だからどうだろうかと思います。

安田

私の専門分野はごみ分別とリサイクルなのですが、近隣市町村に先駆けてごみの分別に取り組んだ市の方針を誇りに思っています。特に、燃えないもの以外何でも燃やすという方法は間違いだと思っています。

私も環境アドバイザーを活用してほしいと思うので話します。

環境部がしっかりと分別方法を決めて、一生懸命、地域等でその説明をしてきましたが、残念ながら市民には思ったほど周知されていません。私が派遣された時には、分別の話だけでは寂しいので市のビデオを活用して、なぜ分別するのかを目で見てもらい納得していただいております。町内の役員だけが見ていたのか、このビデオを市民は見てな

と思います。

アドバイザーとして市民の研修に派遣され、参加者に要望されることがあります。

燃やせるごみは週2回収集に来ているので5リットルと10リットルの袋があれば十分で、40リットルの燃やせる袋はいらない、逆に燃やせないごみの袋は40リットルは必要ということです。段ボールはそれほど出ないが、むしろ紙製容器包装の排出日が2週間に1回では少ないので、燃やせるごみとして出しているそうです。紙製容器包装はプラスチック容器包装と同じくらい出るので、月2回は少ない、増やすべきだと言うのです。

もう一つは、その地域住民以外の方がごみステーションに捨てていくが、どうしたら良いのかということです。私は車で来て捨てているのであれば、車のナンバーをひかえておいて、環境部へ連絡するよう説明していますが、何か良い対処方法はないのでしょうか。

そして、このようなごみステーションでは、近所の方が自宅の有料袋を持ってきて掃除していると言うので、私は市のボランティア袋があることを教えていますが、そのことはほとんど周知されていないということです。

もっと環境アドバイザーを活用して、市民に適正な排出方法やなぜ分別が必要かということがアドバイスできないのかなと考えています。

市長

ちょっと検討させていただきます。

鈴木

東光に住んでいます。

私は「安全な暮らし」が分野なのですが、市民が安心して暮らしていけるということは災害に備えるということですが、防災センターが予定どおり進んでいないということなので、予定どおり早期に完成させてほしいと思います。同規模の他都市にはすでに防災センターがあると聞いていますので、ぜひ大幅に遅れることがないようにお願いします。

重複は避けますが、安田さんからお話があったとおり、ごみをリサイクルすることにより逆に二酸化炭素の発生するものや費用がかさむものもあるので、処理する前にそのようなものは「つくらない」、「つくらせない」という取組が必要ではないかと考えています。国と協力しながら進めていくのも良いのではと思います。

3、4日前に新聞で読んだのですが、小松菜を作っている農家で二重のビニールハウスを使って灯油を使わない努力しているところがあるそうです。どこも財政難の時代だそうですが、それぞれプロが創意工夫して、みんなで協力して乗り切っていかなければと思います。そのような環境に配慮した、省エネルギーの取組をしているところには奨励金を出すなどの制度を設けてはどうでしょうか。

市長

防災センターは今年の10月に中核施設が完成予定です。集配所・訓練施設などの周辺施設がまだいくつか今後の予定の中で残っていますが、そのあたりも市財政を見ながらですが捉えていきたいと思っています。他都市についてはわからないので参考にさせていただきます。

岡出

岡出といいます。よろしく申し上げます。

環境教育にもいろいろなかたちがありますが、綺麗なものを見ていくというのが薄いと思っています。

希望のあること、綺麗なものを見ていきたい、というのは自分もそうであるから、子どもたちにも見せて行ってほしいと常々そう思っています。

平成3年から近郊の学校へ花を持って行って、教室にその花を子どもたちに飾ってもらっているのですが、その中でとても変化がありまして、先生が花がこうだとか、ごみは捨けないようにしようなど言ったのではなく、自然にそういう変化が出てきたのでそれをお話し

したいと思います。

近郊の学校は生徒が 338 人いるのですが、平成 16 年の年にアンケートをとりまして、「お花をいつも飾っていますか」、「どんな気持ちになりますか」など 10 項目について、子どもの拳手（こぶし）で先生にとりまとめてもらいました。アンケートの内容は、「花を飾っていますか」の問いに「いつも」が 43.7%148 人、「ときどき」が 19.5%66 人、「ない」が 35.3%121 人でした。学年別にみると、低学年の方が「綺麗」とか「先生の飾っているのを見ている」とか言うのですが、3、4、5 年生になると、忙しくなるのか関心がないのか、先生は花を自分の教室に飾らなくなり、他の先生が「自分のクラスにほしい」と言って持って行くという、そういうような変化がありました。

次に「花を見て明るい気持ちになりますか」の問いに、「なる」が 159 人 47%、「わからない」が 179 人 53%、「綺麗だなと思う」が 247 人 73%、「思わない」が 91 人 26.9% でした。ここは私が先生に飾ってくださいと言って持って行っていないところでした。

「そういう花を飾る先生は好きですか」の問いには、「好き」が 56 人、「すてき」が 58 人、「わからない」が 222 人いたのです。先生がそういうふうに「花にふれているのが良い」と思う感覚が無いのがわかりました。

また、「先生が飾っているのを見ましたか」という問いには、「ある」が 162 人 47.9%、「ない」が 176 人 52%で、半分くらいしか飾ってくれていないのがわかりました。

人から指示されて部屋を掃除する、ごみを拾ったりするのではなく、指示・強要がなく、花を見て触れたりした後で、「自分から片づける、掃除とか、自分の心の覚醒で思った記憶を持っていますか」と聞いたところ、「ある」が 100 人 29.5%、「ない」が 238 人 70.4% でした。指示・強要がなくても「ある」と回答した子が 100 人もいたのです。指示・強要が一切なく、自然にそのように思えるのはすばらしいと思います。誰かに与えられたのではなく、自然に自分から思うことは力があります。自分から思ったことは強いですから、環境保全、環境美化、エネルギーなどいろいろなものに関わっていくでしょう。それを促す力が花にはあるのではないかと感じましたね。

綺麗なものを見てると力になります。人類が洞窟に住んでいた太古の昔も花と関わりがあったそうです。感覚的、視覚的、味覚的に明るい、綺麗なものを見るのはとても生きる上で大事なことだと思っています。

このように花を見たりすることで、自発的に掃除などをする気になった子たちが 100 人もいたのを知ってもらいたいと思います。そしてそれを環境教育に取り入れてほしいのです。教職員やカウンセラーの方々がこのような教育を受けて、子どもたちや老人といろいろなことに関わって、環境教育だけでなく、生き甲斐を持ってもらい、地域にも生かされていく、そういうことに力を入れてほしいと思います。

環境省の環境教育リーダー養成講座というのがあり、そこに出席されていた教職員の方々とお話しをしたところ、「環境教育は大事なことだと理解しているが、なかなか時間がない」と言っていました。それも「自分が一番心が痛いのは、明日持って来るノートを持ってこない子、買ってこれない子、家庭でも用意できない子」、「そういう子どもに環境教育など必要でしょうか」と本音を言われました。「家庭がきちんとなっていない、そんなことしている段階ではないですよ。家庭がきちんとなっていない子にそんなこと言えないですよ。」と話していました。

花というのは総合芸術であって、自然の秩序も調和も、また人の愛情が入って育てられるものなので、花を見てお年寄りと子どもが交流するなど、いろいろなことができるので、ぜひそれを使ってほしいと思います。

私の知っていることがあれば、全部お伝えして教育させていただきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

市長

花はすばらしいものですね。

浅野

浅野と申します。よろしくお願いいたします。

以前、西川市長さんとは農業の関係でお話しをさせていただいたことがあるので、少し重複するかと思いますが、お聞きいただければありがたいと思います。

私は農業の分野での環境アドバイザーということで依頼を受けまして、自分がどのような話をできるのか、いろいろ迷っていたのですが、ある老人クラブから「安心な野菜作り」ということで依頼を受けました。安心な野菜作りとはどういうことかという、やはり農業や化学肥料などについてぜひ教えてほしいということでした。

実際、私たちは本業で農業をしている中で、家庭菜園で使う農薬の量が多すぎるということが気になります。私たちは農業者として農薬を買うことに規制を受けていますが、ホームセンターへ行けばすぐ手に入るものですから、隣近所で非常に気持ちが悪くなるなどのトラブルがあります。安心な野菜作りということで、隣近所との関係を良好にするためにも、ある意味野放しになっているような農薬の使用なども気を遣ってほしいと話しました。

アドバイザー以外では、市民の方に1年間通して農業体験していただいたり、また子ども、小学校5、6年生を対象に農業の通年体験を行ったり、私個人で小学校の田んぼで指導したりしていますが、1年間つきあってもらうことで、農業・食・自然の大切さを実感してもらっています。

こうすることが環境アドバイザーの講座で、体験を伴うようなプログラムとしてできればなお良いなと思っていますが、実際にはなかなか体験までは行かないです。

今日も本州から修学旅行生が農業の体験に来ますが、このように道内外の幅広い世代に農業・食・自然の大切さを知っていただきたいと思っています。

そういう中で市民農業大学を卒業した人たちが、農業の大切さを実感した中で自分たちの生活を見直していきたいという動きが出ています。それが「旭川アグリガイドネット」ということで、もちろん農業の大切さをみなさんに知らせるだけでなく、自分たちが生ごみ堆肥化をしようという動きもしているし、イベントでごみの分別を指導したりとか、そのようなことを一人一人の市民が自覚をもってやっていこうという実感があります。

先に安田さんの話で感激したのは、みなさんやりたい気持ちがあるのですが、環境に対して何をしたいかわからない、なかなか道がわからない、入り口がわからない、自分が何をしたいかわからないのが現状でないと、それをきちんと示してあげると市民一人一人が力を発揮してもらえるのではないかと思います。特にそれを子どもに徹底してあげたい。先ほど環境部長から、学校からはなかなかゆとりがなくて依頼がないのが現状だという話がありましたが、なんとかそこに食い込んで、しっかり教えていく。そうすると私たちの子どもがそうでしたが、「空き缶拾いなんかするの嫌だな」と子どもは言いますが、嫌な思いを体験した子どもは空き缶を捨たりなどしませんし、また大人が捨てているのを見て、「捨てたらだめだよ」と子どもに言われるとポイ捨てを止めるんですね。ですから子どもへの教育が一番大事なのではないかと思います。

それと少し農業の専門的な話になりますが、この頃、自然と人との境界が薄れてきて、今まで山にいた動物が人間の住んでいるところに降りてきて、例えばシカなどが農作物を食べてしまうなど、いろいろ問題が農業現場で起きています。自然と人間の共存も良いのですが、どの辺にボーダーラインをどのように持つのか、自覚していただかないと、不法投棄が引き金になっているのかわかりませんし、いろいろな面で考えていかなければと思います。

旭川全体の自然を含めた中で、私は農業の立場で環境について考えていきたいと思っています。

市長

どうもありがとうございます。

丹下

東旭川から参りました丹下と申します。よろしくお願いいたします。

しばらく出番がありませんが、環境アドバイザーとして、地球環境・地球憲章・安全な食品について担当させていただいております。

今、地球の危機が叫ばれております。そのため個人はもちろん地球規模で考えなければなりません。そして安全食品の方は、いろいろ汚染されていると言われており、中国で大量生産するためにいろいろな農薬を使用していることについて問題になっています。

消費者の方は安いものはほしいが、危ないのはどうかとなっており、そのため、やはり地場産品や地産地消など叫ばれており、安全な食品の生産が地域の特色のひとつとなっています。

私の個人的な感覚なのですが、この旭川は20年くらい前まではマイナス30度くらいになっていましたが、10年くらい前になるとマイナス20度がせいぜいです。このまま温暖化でマイナス20何度はそう何度もなくはないかと思えます。温暖化が加速すると、今後10年間の間でマイナス10度になってしまうのではないのでしょうか。そういう状況をふまえて現実的に対処しないと、20年前の状態に対処しようと思ってもズレてしまうのではないかと思えます。

洞爺湖サミットがありますが、旭川市民が北海道で行われるサミットに関心を持ち、またサミットとまでいなくても、旭川市としてどう取り組むべきかということを示唆していただき、今回のような会合や大学の教授とか環境アドバイザーとか北海道の関係の方々を招いて、ミーティングのような形で、公開して市民の方に参加してもらうのもよいのではないのでしょうか。そうすることで自分がどのようなものを持っているか、掘り下げて自覚するのに良い機会になるのではないのでしょうか。

広報関係ですが、以前、旭川ケーブルテレビの番組に環境アドバイザーとして奥山さんほか数人で出演していましたが、私は国連環境計画での訴え方が「ひどい、すごい油まみれになった鳥」などを表面に出して非常にインパクトがあると思えます。汚いのは隠したいといった心理もあるのですが、現実をアピールしてこそ環境意識の高まりがあると思えます。また、誰かが作ったものでなく、子どもの集めたものをビデオにするとか、美しい北海道の環境をクローズアップするとか、参加した市民が旭川をアピールするものをつくって広報することが重要です。

以前、北海道教育大学附属旭川小学校に派遣された際に、児童たちに「旭川の良いところ・どんなまち」と考えてもらいました。結構良い所だという答えがありまして、札幌や東京に行ったまま帰ってこない若者ではなく、ずっと住みたい、すばらしい旭川があるんだという夢を子どもに持たせられるようなきっかけ、動機付けする機会になりました。青少年を大切に育成する、そんな旭川市になっていくのではないのでしょうか。

まだ先の話ですが、道路のアスファルトの材料が原油で、コンクリート舗装などもありましたよね。雨をはね返すのではなく、透過するアスファルト舗装など今はいろいろのがあります。土、ほとんど砂利ですが、その中を通して地球の中に入っていく、地熱のもと、コアから地核に触れて窒素が出て、雨をはじかないで、浸透させることは自然のリサイクルになるので重要です。

先ほど自然に順応する、生態系が変化すると話したのですが、琵琶湖のブラックバスが、今はスーパーに売られているそうです。このように状況は少しずつ変わるので、自然の復元というのもありますが、順応する必要もあると思えます。

温暖化に合わせて変化する点では都市生活もヒートアップしています。伝染病の危険もあります。北海道が良いところだと皆で意識して生活すると良いと思えます。

市長

ありがとうございました。

松尾

旭川消費者協会の松尾です。今日は団体として参加させていただきました。

消費者というのはどちらかというと事業者から見るとあまり重視されておらず、事業者というのは利益優先と見られていました。

福田総理が所信表明で、「生産者第一の考えから国民生活を重視したものへと転換していかなければならない」、「大量生産・大量消費についても、これから持続可能な社会へ転換すべきである」というようなことを言っており、私たちはなお元気が出てきました。ずっと続けています環境活動として、かつてはノー・トレーということで宣言をしようということまで行っていたのだそうですが、その後のことは私たちにはよくわかりません。

平成15年からノー・レジ袋運動に取り組んでおります。そのときは事業者と消費者と行政のみなさんも応援してくださり、私たちも手探りながら一生懸命進め、今から3年前に15団体となりノー・レジ袋推進運動連絡会というものができました。

その目的を実現するためには、それぞれの団体が一生懸命活動して、目的に向かって頑張らないと、どこかが手を抜くとどうしても前に進まないんですね。

私たちは、旭川市がノー・レジ袋運動宣言など、そういうことを打ち上げていただきますと、市民も環境問題に取り組みやすいと思います。ノー・レジ袋が基本ですが、今、ごみや自然など環境のいろいろな分野で考えなければならぬこと、取り組まなければならぬことがありますから、ノー・レジ袋宣言をぜひ行っていただければと思います。

宮嶋

旭川消費者協会の副会長の宮嶋です。

消費者協会は昨年に環境アドバイザーへ登録していただきました。

先ほど石井さんが「市民が市民の目線で環境を考えるというように」とおっしゃっていましたが、消費者協会は正にそのところを目指して独自の活動を続けてきています。

毎月店頭で「買い物に行く時にはなるべく買い物袋を持っていきましょう」と呼びかける活動を続けているのですが、これを始めた頃に比べるとお店の側の協力・対応が違ってきています。昨年10月に「ノー・レジ袋を推進しています」というたすきを300枚作ったのですが、今はお店の方も毎月5日にはこのたすきをしてくれています。

私たちは黄色いジャンパーを着て活動しているのですが、毎月5日にお会いする市民の方からも「持ってきたよ」とか、持ってきていなくても「今日は忘れた」とか、非常に協力的で、市民と共にやっている運動、活動になったとひしひしと感じています。

松尾会長は北海道の環境審議会の委員で、旭川消費者協会として私も「容器包装の排出抑制の推進会議」の委員をさせていただいていますけれども、消費者協会はもちろん、道も通産省も環境省も旭川に期待を寄せているなあと感じています。

せっかく市民の意識も高まってきていますので、洞爺湖でのサミットもタイムリーに行われるので、北海道の先頭に立って取り組んでいるまちとして、例えば「ノー・レジ袋のまち宣言」を行うなどするとよいと思います。旭川はお金がないのは重々承知していますが、お金をかけなくてもできることはたくさんあります。私たちの旭川を元気なまちにしようという思いは市長と同じだと思います。今年あたり都市宣言を行っても良いのではないのでしょうか、ぜひしてほしいと思います。

私たちも最大限のお手伝いをさせていただきます。すでに大型店ではしていることですが、旭川市内の全ての店で「袋が必要ですか」とお客さんに言っていただき、袋を持ってきている方には「ありがとうございます」と言っていただく。そうすることによりお店の方も環境に進んだお店ということになりますから、全ての店でそうしていただくことは可能なことです。ですから「ノー・レジのまち」を宣言する都市として、恥ずかしくないのではないかなあと思いますので、ぜひ検討していただきたいと思います。

私たち消費者協会は消費者講座を年間に30回から40回行っていますが、講座では初めに「今、地球はどうなっているのか、それは何が原因か、私たちはどんな生活をしなければならないだろうか」といったことをなるべく入れるようにしています。

宣言の方、ぜひ検討していただくようよろしくお願いします。

市長

ありがとうございました、検討させていただきます。

寺島

2つだけ話をさせてください。

一つは、川を生かした川のまちづくり。もう一つは大雪山の世界遺産の問題です。

まず川の問題ですが、旭川は川や橋の数は非常に多いのですが、生き物という視点では旭川の川はあまり魅力がありません。それは河川改修の影響や都市化の問題があるかと思いますが、やはりこれをもっと川らしくすることが基本になるのではないかと思います。

旭川の川を魅力的にするためにサケを回復させたい、かつてはサケの川の原点だったのに今これが途絶えているのは何とも寂しいとの思いから26年前からこれに取り組んでおりますが、ぜひ実現したいと思っています。

そのためには河川環境を整えないといけません。ただ放流するだけではダメです。また当面、野生のサケが定着するまではサケの放流数を多くしないといけません。最近やっと2万匹程度を放流することができるようになってきたのですが、最近サケ・マスふ化場の方で応援したいという動きが出てきていますが、もう少し増やすために、旭川市の協力もいただきたいと考えています。

もう一つは、川辺での花火大会は良いのですが、ちょっと川に憩いに行こうとした時に水辺に親しむ所は少ないのではないかと思います。川の自然・水辺の生態系や先ほど話題に出た河畔林を復活させたいと思っています。治水上の問題もあるのですが、河畔林は堤防の中だけとは限らず堤防の外でも良く、また旭川には生き物がたくさんいる緑地があるので、それを繋いでネットワークする方策を考えたいと思います。いずれにしても旭川の場合は国が管理している河川が多いので、「市では何とも」という発想が当然あるでしょうが、市は国や道に意見・要望という形で川の利用について意見をあげることができます。

また、河川敷公園という形で、実は国の管轄・管理の河川敷をかなり使っていますが、花壇やパークゴルフ場が悪いわけではないのですが、やはりそれだけではダメで、もっと周辺の流域を繋ぐ自然の連絡性を考える形で河川敷公園のあり方を模索する必要があるのではないのでしょうか。

今、国が進めている河畔林の連続性の中でネックになっているのは、雪捨て場です。広大な面積でそこがかなり大きな空き地になっています。ここを少し工夫することによって、河畔林の連続性を生かしながら、うまく構想ができるのではないかと、そういう発想をお願いしたいと思います。

それからもう一つは、これも国がちょうど構想しはじめているのですが、市民が川に近づけ親しめるフットパスを市は積極的に進める必要があります。大それた道を作る必要は全然なく、踏みわけ道程度のでかまわないと思います。河川の中にもいろいろ見どころがあって、ビックリグミ、クルミの生えている所、サケの集まる所、カワセミやショウドウツバメの来るところなどいろいろ楽しめるところがあるので、こういうところを繋いでネットワークにする。また同時に大きい河川では国の管轄の中のフットパスになるから、市は近隣の緑地、自然公園とか文学施設とかいろいろな旭川市の文化財があるところを連動するネットワークについても構想していただけないかと思います。例えば知里幸恵の通学路の取組のように、そういう国の管理の河川のフットパスからそれに連動した市のフットパス、ゆくゆくは近隣の市町村の美瑛とか上川とか鷹栖とかとのネットワークで整備し繋がると、市民も川に近づけて親しめるし、健康にも良く、魅力あるコースになるのではないかと思います。

それから、観光客も旭山動物園効果で大勢来ているようですが、旭山動物園だけでなく、魅力ある場所をいろいろな所に作りながらそこに観光客を誘導するために、エコツアーガイドが必要だと思います。環境アドバイザーという組織もあるし、旭川自然資源共生ネットというものもあるのですが、もっと大きい生活者を含めたエコツアーガイドが必要になるのではないかと思います。

大雪山の世界遺産の問題ですが、市長の公約にも触れられていたと思いますが、実は私たちが10年くらい前から取組を進めています。自然そのものについては知床の例のよ

うに候補に浮上するのですが、もう一つ決め手を欠くのは「地域の取組が弱い」と言われている点です。ですから、すぐれた自然を持つと同時に市民と行政が連携した組織づくり・システムづくりをぜひお願いしたいです。

大雪山の場合、実は難しい部分があり、大雪山の高山帯をアピールするだけでは世界遺産になるのは多分難しいのではないかと考えています。支える森林があっただけで高山帯も潰れる、またその森林に住む熊を、熊は世界的に重要視されてきているので、これをどう保護するかといった見通しが立たないと難しいと思います。

それから今の森林は皆伐や乱伐があって無惨な状況です。それら負の部分はどうするか。ただ登録、登録と一直線に進むのではなくて、仕組みづくりを検討しておかないと、他の地区と同じように後手後手に回って手遅れになることもありうると思います。さらに外来種も障害になっています。セイヨウオオマルハナバチが高山帯に定着しているかどうかはわかりませんが、侵入している形跡はかなり強くなってきています。今のところ大雪山に進入した経路は東側よりは旭川側の傾向が強いのではないかと思いますので、旭川市側で外来生物の密度を下げる取組を進めることで、大雪山への侵入を防ぐことができるのではないかと思います。

これらのマイナス条件への対策を検討しつつ、大雪山の世界遺産登録を進める枠組みをすぐにつくってほしいと思います。旭川市と帯広市が中心になって動かなければ、近隣市町村のネットワーク・地域的連携の取組は難しいので、できることから取組を開始してほしいと思います。

これらのマイナス条件への対策を検討しつつ、大雪山の世界遺産登録を進める枠組みをすぐにつくってほしいと思います。旭川市と帯広市が中心になって動かなければ、近隣市町村のネットワーク・地域的連携の取組は難しいので、できることから取組を開始してほしいと思います。

市長

ありがとうございました。

岡出

先ほどの話の追加ですが、花を持って行った学校は旭川小学校なのですが、92歳で亡くなったヴィクトール・フランクルという精神科医のアウシュビッツ強制収容所での体験記「夜と霧」の中で、「生き残った人は綺麗は綺麗と思えて、可愛いと思える人で、宗教ではなくて祈ることができる人、たくさんの中に隠れている人、人を前に押し出して生き残ったのではなくて、そういう人が生き残ったのですよ」と書いています。私もそういうつもりで綺麗なものを平和なうちに見てほしいと思ってやってきました。ぜひ、そういう言葉を覚えていただいで、生かしていただきたいと思います。

市長

わかりました、ありがとうございました。

奥山

長時間にわたりいろいろな意見を聞いていただき、ありがとうございました。お礼申し上げます。

11人、11とおりのいろいろな意見、取組、対応ですが、私たち環境アドバイザーは自らの能力、見識を持って努力をしてみたいです。

少しでも良いまちにしようと、今日出たことが何らかのかたちで現れてくれればと願います。

本当にありがとうございました。

市長終わりのあいさつ

長い時間にわたり、今日はいろいろな貴重な意見・お話しをお聞かせいただき、ありが

ありがとうございました。

私も、みなさんの意見をお聞きしまして、本当にそのとおりだなあという話もたくさんありましたし、非常に大きな取組として行っていかねばならないなという部分もございました。また少し知恵を絞って、何とか一歩を踏み出すことができるようなお話しもお聞きました。

旭川市も環境をリードする都市として、これからもぜひ取り組んでいきたいとも思いますので、いろいろな部分でお世話になることもあるかと思いますが、よろしくお願ひしたいと思ひます。